

日本家庭科教育学会 2021（令和3）年度例会 プログラム

2021年12月5日（日）

13：30～15：40

オンライン開催

【日 程】

開会

13：30 開会の辞

13：32 会長挨拶

シンポジウム

13：40 シンポジスト紹介

（コーディネーター 中西 雪夫 氏）

13：45 小笠原 由紀 氏

14：00 村田 晋太郎 氏

14：15 大嶋 佳子 氏

（休憩 14：30～14：40）

14：40～15：30 ディスカッション・質疑応答

15：35～15：39 まとめ

閉会

15：39 閉会の辞

【シンポジウム】

2021年12月5日（日）13：30～15：40 オンライン

テーマ： ジェンダー視点で考える家庭科教育の現在とこれから

趣旨

男女共同参画社会基本法制定から約20年が経過した。この間、高等学校家庭科の男女共通必修が定着し、小学校から高等学校まですべての児童生徒が家庭科を履修した世代が社会の中核を担うようになった。しかし、2021年の日本のジェンダー・ギャップ指数の順位を見ると156か国中120位という低位に位置しており、大きな変化はみられない。

これまでの家庭科教育研究の中で、家庭科教育の成果として、ジェンダー意識や家庭への参画に寄与してきたことが、研究の蓄積から明らかになっている。家庭科教育がジェンダー平等実現のためにどのような役割を果たしてきたのか、家庭科教師の役割と家庭科の授業実践の可能性を可視化させ、家庭科教育の今後の可能性について意見交流をする場として、シンポジウムを行う。シンポジウムでは、授業実践や研究の成果から明らかになったエビデンスを基にした各シンポジストからの提案を受けて、家庭科の教育効果について共有し、今後の家庭科教育の在り方・方向性についての提言となることを期待する。

シンポジスト

小笠原 由紀 氏 横浜国立大学教育学部附属横浜小学校 教諭
村田 晋太郎 氏 三重大学教育学部 准教授(元中学校教諭 技術・家庭科)
大嶋 佳子 氏 福井県立藤島高等学校 教諭 (家庭科)

コーディネーター

中西 雪夫 氏 佐賀大学教育学部 教授

シンポジストのプロフィールと報告内

小笠原 由紀 氏

プロフィール

横浜市公立小学校にて5年間勤務後、昨年度より現職。児童が自分事としてかかわれる材やテーマの選定、また児童が様々な家庭の価値観に触れる機会を大切にすることで、児童の自立した生活者としての資質・能力を育てていけるよう日々の実践と向き合っている。

報告内容

児童は夏休みを使って家庭の仕事に取り組み、その大変さや大切さを実感した。また、活動を通して我が家を見つめたことで、家族の特定の人とその役割を担っていることにも気づくことができた。しかしながら、「家庭の仕事は、親（大人）がやるもの」といった考えをもつ子は多く、それに加えて「家事のほとんどは母親が担うもの」といった家庭の仕事と性別を結び付けて考える子の姿も見られ、本実践を通して児童の家庭生活や家庭の仕事に対する考え方や価値観が明らかになってきた。そのような児童に対し、本実践では実際に家庭の仕事も多く担っている保護者の協力を得て、家族から捉えた家庭生活の課題を提示する場を設けた。自分と家族、双方の視点から捉えた家庭生活の課題を比べ生まれた家庭の仕事に対する考え方や価値観のずれを問うことで、児童が改めて家庭生活について見つめ直す機会をつくっていく。本実践を通して、立場、性別ではなく、誰もが自立した個であり、生活者であるという家庭生活に対する児童の意識の変容について考察する。

村田 晋太郎 氏

プロフィール

大阪教育大学卒業。大阪府吹田市にて中学校家庭科担当教諭として着任。途中、大学院修学休業制度を利用し、兵庫教育大学大学院修了。兵庫教育大学連合学校教育学研究科修了（博士：学校教育学）。大阪教育大学特任准教授を経て、現職。

専門は家庭科教育学(主に教育目標や教育評価、家族の実践研究)。

報告内容

男性家庭科教員として中学校で勤務していた教育経験とこれまで行われてきた男性家庭科教員を対象にした研究で明らかとなった知見とを関連づけ、ジェンダーの側面から家庭科教育の今後の方向性に対する話題提供を行う。

男性家庭科教員として採用され、特に男子生徒に対して「これからの時代は、男性も女性も一緒に家事や育児を協力して行う」というテーマを基軸に教科指導をしてきた。もちろん、自分自身が男性であり男子生徒に対する説得力は大きいと感じており、かつ男女で協力して家庭生活を営むことを自分自身が望んでいたからである。生徒たちは、男女とも全体的には家庭科に対して好意的に学習してくれていた。一方で、2つの葛藤を抱えながら実践していた。1つは、主婦である母親像に憧れていた女子生徒にとっては私自身のメッセージは否定的に伝わっているのではないかという点である。2つ目は、性別役割分業に対するメッセージを伝えることによって「隠れたメッセージが消失し、生徒のなかで性別役割分業観が少なからず修正される(吉野・深谷,2001)」ことは感覚的には感じてはいたものの、近代家族規範の強化につながっていないかという点である。これらの葛藤に対して、最適解が持てないまま、自信を持って男女で協力していこうと言えない自分もいた。学級全体の教科指導において、どのような立場で家庭科教育実践を行えばいいのか、検討していきたい。

吉野真弓・深谷和子(2001)男性家庭科教員の意義と役割—生徒のジェンダー形成とのかかわりで—,日本家庭科教育学会誌,44(3),pp.242-252.

大嶋 佳子 氏

プロフィール

大学院修了後、2001年(平成13)県立高校教員となる。現在21年目。この間、普通科高校、職業系高校、中学校に勤務。現在の勤務校は5年目。知的好奇心の高い生徒が多い勤務校で、家庭基礎2単位の中で問題解決や探究のステップを踏ませる授業のデザインと一人一人に生活力をつけることとその意欲につながる授業実践を模索中。

報告内容

私自身が学生時代共同研究で関わった1999年頃の高校家庭科ジェンダーの授業実践研究から、ジェンダー学習に有効な視点を学んだ。①生活者として「自立」する力をつけていく学習は性別によって役割を固定化することの不自然さに生徒自身が気づき、ジェンダーを払拭するエネルギーとなり得る。②「女らしさ・男らしさ」は社会によって作られたものだと気づくのは「自分は何が好きか」「自分はどうしたいか」と「自分らしさ」に向き合い自分自身を大事に思うときである。③将来の夢や職業を考える視点を入れることで、現代の職業労働や家庭をとりまくジェンダーの実態や問題点がリアリティのあるものとなる。この学びが土台となり、現在も授業構想する上でこの3つの視点は大事にしている。さらに家庭科の学びはすべてジェンダーを乗り越えることにつながっていると考えている。本シンポジウムにおいては主に現任校での家事労働の性別役割分業から自分自身の生き方、社会のあり方を考える授業実践「くらしに関わる仕事と自分、そしてこれからの家庭生活と社会を考える」を紹介し、授業を通して授業者として伝えたいこと、それをどのように学習活動に展開したか、生徒の反応や捉え方、変容したかどうか等報告したいと考えている。